

## ●春日部市民文化講座（第 21 回） 「戦国武将の癒しとしての茶の湯」

◆日 時：2016 年 9 月 28 日(水) 11 時（ばばら春日部 4 階会議室）～12 時

## ■戦国武将の癒しとしての茶の湯

今日のテーマは『戦国武将の癒しとしての茶の湯』です。戦国武将で、ぼくが研究している一人に**大友宗麟**がいます。九州の覇者でキリシタン大名としても有名ですが、彼は九州のさまざまな大名との間で確執があり戦の日々を送っていました。家来の一人が、こんなことを書き遺しています。「茶の湯をやっていないかったら、この世相を生きることができない」と丁寧に書いているのです。毎日のように殺し合いや裏切りがあり、殺伐とした戦国時代にあって、先ほど増村先生が仰ったような「ホッコリとした春の日だまり」を武将たちが感じられるのが茶の湯だったのです。茶の湯で用いられる茶碗、高麗茶碗のような磁器はお湯を入れるとアツチツチですけれども、利休さんが長次郎に焼かせた陶器は柔らかな土器です。この土器にお湯を入れて両手で包んでみるとホッコリとした温もりがあるのです。人肌なのですね。戦国武将たちは、こうした人肌のぬくもりを乞うていたのです。

## ■利休の茶の温もり、人と人とのふれあい

戦国時代は下克上の時代でした。殺戮や裏切りが毎日のように繰り返されていましたが、そんな中にあっても、茶の湯は行われていました。そして流行ったのが「利休の茶(りくうのちゃ)」だったのです。そこには温もりがあり、人と人とがふれあうことができる茶の湯だったのです。それまでの格式ばった台子の茶、貴人に出す唐物の冷たい茶の湯ではなく、格式も身分の隔たりもぬぐい去った茶の湯が利休の茶でした。その象徴が「躰り口」です。大名も町人も全てが頭を下げて入る入口です。刀さえも外に置いて入らなければならない仕掛け、外側の刀掛けが用意されていました。茶の湯では「一座建立」という言葉がありまして、茶室の基本は京屋ですから 1 畳に 3 人がゆったりと座ります。そのお客様と亭主の呼吸があわなかったら、茶の湯は成り立たないのです。利休道歌に「茶の湯とはただ湯をわかし茶を点ててのむばかりなる事と知るべし」とあるように、茶碗と茶筌を持って来て、お客様にお茶を一杯振る舞うことが基本なのです。そこには、亭主の人格が表れます。ですから、お客様が一杯のお茶をいただいて「ホッコリしたな」というのが一番のおもてなしなのです。人と人とが笑顔でこんにちとは言える場が茶室であり、もてなしの場なのです。

## ■茶の湯を政治に

戦国時代は国のあちらこちらで戦をしていました。京の都も戦場となり荒れ果ててしまいました。そこで、文化人たちはさまざまな土地に逃げていきました。そんな土地の一つが堺でした。堺は南蛮貿易の拠点であり、さまざまな国や土地から商品とともに文化が入って来ていました。それを取り仕切っていた人たちが納屋衆です。そんな納屋衆の一人に武野紹鷗がいました。武野紹鷗は、村田珠光に次いで「わび茶」の祖と言われますが、四畳半の茶室を考案した人で千利休の先生にも当たります。そんな堺に目を付けたのが織田信長です。彼は「名物狩り」と言われる茶道具を集めました。それらを論功行賞にも使い、当時の武士が城一国をもらうよりも茶入一つを欲しがったという話が残されている位です。さらに織田信長が始めて、豊臣秀吉がそのままそっくり受け継いだ政策が「茶の湯御政道」と呼ばれています。これは信長が特定の家臣に茶の湯の許可を与えたものです。



## ■利休七哲

ここで人間関係を整理していきましょう。堺の納屋衆で茶人の**武野紹鷗**がいて、その弟子で利休と同門の**日比屋了慶**がいます。**千利休**がいます。そして、千利休が初めて茶碗を焼かせた**長次郎**です。長次郎は瓦職人と言われているのですが、彼がどういう人だったのかということは分かっていません。中国から渡ってきた人とも言われていますし、当代の樂吉左衛門さんによると朝鮮の人だったのではないかと話もありますが定かではありません。それで

も、利休さんが長次郎に焼かせた茶碗には癒しがありました。戦国武将の癒しの原点でもある「ホッコリ」としたものがああります。さらに、人と人をつなぐお濃茶の回し飲みがありました。これも癒しの原点です。さて、そんな利休さんに 7 人の弟子がいました。利休さんの子・少庵、その子・宗旦、さらにその子・江岑宗左、4 代目が書いた「江岑夏書(こうしんげがき)」に、この 7 人が出てきます。一番目が**蒲生氏郷**(1556-1596 年、会津 91 万石の大大名、キリシタン)、二番目が**高山右近**(1552-1615 年、高槻城主、明石 6 万石大名、キリシタン、パテレン追放令で返して前田家の客将、最後は国外追放)、**細川三斎**(忠興、1563-1646 年、肥後細川家初代、熊本 54 万石の大名)、**芝山監物**(宗綱、?-、秀吉の御伽衆、)、**瀬田掃部**(正忠、1546?-1595 年、秀次と懇意)、**牧村兵部**(利貞、1546-1593、伊勢国内 2 万石大名、キリシタン)、最後が**古田織部**(重然、1543-1615 年、二代將軍・徳川秀忠の茶の湯指南役、自刃)です。でも、この織部には「茶之湯無能御座候」という言葉も…。

### ■千利休と高山右近

島津征伐の時に、秀吉から急にバテレン追放令が出され、「俺を取るか、キリストを取るか」と訊かれた高山右近は、使者であった利休さんに即座に「城も領地も返します」と言って遁走するのです。最初は秀吉に殺されるのではないかと疑い、小西行長の領地・小豆島に隠れ、その後、前田利家を頼り前田家の客将となります。利休さんと高山右近の間ではたくさんの書状が出て来ます。その中には、**1 畳半の茶室**の話も出て来ます。利休さんの「**わび茶**」3 点セットとしては、まず**台子**を用いない**道具組**です。次に**点前**、そして**茶室**です。全てにおいてシンプルなのです。余分なことを全て取り去ったものが「わび茶」なのです。茶室には松風と自然の空氣の動きだけ、人と人とのふれあいを大切にし、点前も非常にシンプルにしたものでした。今、私たちが知っている「わび茶」というのは、利休さんが北条征伐に同行した頃からのもので、江戸時代になって完成したと思われます。利休さんはその頃に二つの茶室を造っています。一つは現存していませんが「**黄金の茶室**」で、もう一つが国宝の「**待庵**」です。この「待庵」の建築に当たって利休さんは右近に柱の目利きをしてもらっており、1 本を遣ったと書状に遣しているのです。1 畳半の茶室の見取り図を作った時にも、手紙をしたため、「クルスにしました」と書いてあるのです。



黄金の茶室、MOA 美術館



国宝「待庵」

### ■茶の湯が400年以上も何故続いて来たのか

利休の茶の湯が何で 400 年以上も続いて来たのかというと、隣人愛なのです。「もてなし」を聖書では「憐れみ」と置き換えることができます。「わび」を追求していくと隣人に対するお世話になります。戦国時代は戦をすると、時に休戦となります。その時には敵も味方も一緒に茶の湯でもてなしを受けていたのです。九州島津攻めの最中も、博多に茶席が作られています。そのくらいにもてなしに関しては敵味方では無く、全ての人がもてなし、もてなされていたのです。

### ■山上宗二

右近の「わび茶」はキリスト教の茶の湯でしたが、利休さんの門人で北条攻めの時に秀吉に殺された山上宗二(1544-1590 年)は**禅宗の茶の湯**でした。徳川時代に入ると、キリスト教が弾圧され、禅宗を基本とした茶の湯と言われるようになります。それが常識とされ『南方録』が聖典になったのです。今では偽書と言われています。

### ■織田有楽斎

織田信長の弟でありながら、不思議な境遇を送った茶人が**織田有楽斎**(1547-1622 年)です。建仁寺の正伝院に隠居所の**茶室「如庵(じょあん)」**を造ります。それが今日の国宝「如庵」です。現在は犬山の有楽苑に移築されていますが、最初に正伝院から祇園衆のところに移築された時に、解体に立ち会った久田家の宗匠が「如庵の鱗板と水屋の間の三角の所から家宅信仰物が出て来た」と仰っていたそうです。それがマリア像なのか、クルスなのかは分かりませんが、いずれ分かる日が来ると信じています。表千家のお家元が織田有楽斎を語る時には必ず「茶室『如庵(じょあん)』は、一説には彼の洗礼名だと言われている」と触れられているので、何かあるのだろうと思います。



### ■“わび”は“コンパッション”

茶の湯では、茶席が終わって主客共に名残り尽きない思いで別れの挨拶をします。そして、亭主はお客様の姿が見えなくなるまでお見送りをし、茶室に戻り自らに一杯の茶を点てて、お客様の温もりの跡を感じながら自らを癒します。戦国武将たちも、こうしてお客様をもてなして癒し、自らを癒していたのです。最近、私も朝起きると濃茶を練り、今日一日のスタートに感謝し、3 口半でいただき祈ります。「父と子と聖霊のみ名によって、神様私を祝福してく

ださいアーメン」と、お茶そのものによって癒す力があります。日本人であることに喜びがあります。美味しいお茶によって自分をもてなし、癒されています。「わび」は、相手の苦勞、悲しみに共感することであり、私たちの言葉では「憐れみ＝コンパッション」であります。共に苦しむことは、癒しの心でもあるのです。

この回は私の要点筆記のボリュームが少なかったようです。